－追 悼－

# 小張一峰 名誉教授を偲んで

琉球大学大学院感染症・呼吸器・消化器内科学（第一内科）
健　山　正　男（１期生）

琉球大学医学部附属病院の初代院長であり、第一内科を主宰された小張一峰先生が平成22年５月４日にご逝去されました。（享年95歳）。最も長くお側に接することのできた本学の卒業生として、小張先生を偲びつつ、私達、同窓生の大恩人である先生との思い出の軌跡を綴らせて頂きます。

**初めての出会い**

小張一峰先生に初めてお会いしたのは昭和56年４月の入学時の医学部オリエンテーションの会場でした。当時はまだ医学部が発足したばかりで、上原に校舎は無く、会場は与儀の旧附属病院に隣接した保健学科校舎で行われました。医学科一期生として、同期生は皆、これから始まる医学生としての生活に夢を馳せながら嬉嬉として集いました。会場に入ると、大柄で矍鑠とした老荘の紳士がすぐに目にとまりました。血色の良い柔和なお顔立ちでしたが、黒縁の眼鏡から知性が溢れ出て、私がこれまで出会ったことのないタイプで強烈なオーラを発していました。その方が小張一峰先生でした。その時に不遜ではありますが「これが医学部の教授と呼ばれる人物なのか」とただ圧倒され、その時に、これから幾重にも訪れることになる上質の体験が予測され、不思議と医学部に入学した喜びを実感したことを今でもよく覚えております。

小張先生は黒板にoccupationとprofessionというスペルを書かれ、この違いについて話されました。「君たちがこれから目指す職業は生業（なりわい）ではなく、高度な専門技能を必要とするprofessionである。それを忘れることなく学生生活を送ることを希望します」。スピーチの後の会場には幸福な沈黙がありました。一期生の覚悟が決まった瞬間が昨日のように思い起こされます。「私も皆さんと一緒に卒業します。しっかり勉強しましょう」。その時、小張先生の退官は私達の卒業と同じ年であることを知りました。

**小張先生との学生生活の思い出**

小張先生は感染症がご専門でしたが、その講義はWHO時代の世界をまたにかけた活動、軍医としてビルマ戦線従軍でのマラリア罹患の体験、駒込病院・長崎大学時代の研究、まるで千夜一夜物語を聞くようでした。今では大変貴重なスライドが沢山ありました。コレラ患者のとぎ汁様水様便、ヒポクラテス顔貌、腸チフスのバラ疹など。特に私の記憶に残っているのはペストの塔のスライドでした。小張先生の言葉です。「なぜ欧米人は感染症対策に熱心なのか、それはペストの恐怖からである。ペストで欧州の人口は1/3に激減した。その教訓を忘れないためにペストの塔が建てられた」。昨年、私はチェコのプラハで開催されたエイズ学会に参加する機会がありました。学会からの帰途に着くとき、ホテルのスタッフに頼んでペストの塔に案内してもらいました。ペストの塔の前に立ち、30年前の講義のことが鮮やかに思い起こされ、ここで小張先生はあの写真を撮られたことを思うと感慨無量で、塔の前でシャッターを切った写真は、私の宝物であり小張先生と同じように学生の授業でも紹介しています。

**謝恩会のエピソード**

卒業が迫ってきた時期、私は謝恩会の責任者を務めることになりました。一期生の宿命は先例を参考にすることができないことです。個人的な知己を頼って全国の医学部の謝恩会の開催状況を調べることから始めました。全て卒業式の日に開催していることがわかりました。当時の医師国家試験日は、現在と異なり３月23日の卒業式後まもない、４月３日でした。謝恩会の開催日を同期生で集会を開いて議論しました。全国の例にならうことなく、国家試験終了の翌日という意見が大勢で、卒業式の日開催の意見はかき消されてしまいました。当時は一期生の国家試験合格率への関心は学内のみならず県内メディアも注目し、騒然とした空気が張り詰めた異様な時期であったのも否めません。私は印刷会社に依頼した招待状を持って病院長である小張先生のお部屋に伺いました。学生には常に笑顔で接し、決して怒ることのなかった小張先生が、大変落胆された表情を見せ、語気強く「４月には私はもう、いませんよ」とだけ言われて後ろを振り向かれました。オリエンテーションの時に小張先生が「私も皆さんと一緒に卒業します」と話されたことが直ぐに脳裏に浮かびました。小張先生は、最初の入学生を全力で薫陶して卒業生として送り出すことを大きな目標として、公務員では特例の65歳を越えて琉大医学部にご着任になられました。その大きな使命感からみると、沢山の慈愛を受けた卒業生は、なんと学生ゆえの浅はかな、恩知らずの判断をしたのか、恥ずかしい思いで一杯でした。

しかし事は深刻です。同期は既に国試準備のために全国のそれぞれの実家に帰って卒業式もしくは国家試験の日にしか一同に集いません。年度末の繁忙期のホテルの予約確保も心配でした。しかし、物事には譲れない大切な事があるとの思いから、謝恩会を卒業式の日に開催することを決意しました。１日に７時間近く、毎日電話をかけて全国の同期を説得し、１週間後に改めて作成した招待状を持って病院長室を訪れました。小張先生は招待状を見て本当に満面の笑みを浮かべて喜ばれました。安堵した私は病院長室を出ようとすると小張先生が呼び止められました。「ありがとう」もう一度、語りかけて下さいました。卒業生として少しばかりの恩返しですが、間に合って良かったと安堵したのは言うまでもありません。

卒業式当日に開催した謝恩会は、学会の特別講演で出席できなかった１名の教授を除いて全ての教授が出席されました。会の終盤には教授・学生ともに肩を組み、大きな輪となって「仰げば尊し」を大合掌しました。その中央で、美酒に酔い、嬉しそうに歌われる小張先生の姿がありました。まもなくすると小張先生が静かに退席されます。私は慌てて、進行役を他の人に頼んで後を追いました。追いついたときには既に予約されたタクシーに乗り込むところでした。「小張先生、いかがなされましたか。」とお聞きすると、にこっと微笑まれて「年を取ると涙腺が弱くなる、それを見せたくないだけだよ、今日はありがとう」と言われました。所作の美しい本当のジェントルマンを見た思いがしました。

**第一内科入局後**

昭和62年に大学の同期12名と共に、小張先生が開設され、斎藤厚先生が継承された第一内科に入局しました。小張先生は退